

学位論文要約データ

『事例からみる現代の思春期心性』

2019 岩宮恵子

社会の変化にもっとも敏感なのは今も昔も思春期の子どもたちである。

現代は未だかつてないほどの速さで個人端末のコミュニケーションツールが発達している。時間と場所に縛られずにさまざまな情報を得ることができたり、他者と交流することができるようになったりしている時間の流れのなかで彼らは大人になっていっている。普遍的な思春期のテーマは間違いなく彼らの心の古層で動いているが、他者の社会の変化の早さが彼らに与えている影響は大きい。

スマホやネットゲームなどが手元にあるなかで育つというのは、それがなかった時代とはまったく違う。ファミコンなどのゲーム機は1980年代からあったが、その頃はあくまでもそのゲーム機と子どもの関係で閉じていた。しかし今はたいていのゲーム機はネットにつながっており、その向こう側には年齢も性別も顔もわからない他人が存在し、親の知らないうちに子どもはそういう人たちとの交流を深めていることもある。

その一方で、町内会などの自治体に入らない人も増えてきた。住んでいる場所で自然発生的に生まれる共同体は力をなくし、自分で選び取った相手との個人的につくる人間関係のみが困ったときの頼りになる傾向が進んできている。そのため、子育てなども母親が母親同士の個人的な関係を構築できるかどうかで負担の差は大きくなってきている。このような状況は、そのまま子どもたちが過ごす学校現場にも波及している。自分で人間関係をどんどん作ることでできるひとはますます自由に幸せになり、それが苦手なひとにとっては、いくら同じ「場」を共有していてもそこで守られている実感が持ちにくいため、精神的に追い込まれる状況が増えてきている。このように個人的なコミュニケーションが重視される状況が進んでいくなか、他者との関係性に特に敏感になる思春期で、さまざまな困難を抱える事例が増えてきている。

上記のような現代的な状況を踏まえ、臨床現場で筆者が実際に担当した事例を提示しながら、現代の思春期心性について明らかにしていくことを本論文の目的としている。

第一章では心理学からだけでなく、進化学、脳科学、精神病理学などの知見から思春期についての科学的な研究が進んできていることについて概説した。特に脳科学からのアプローチによって、思春期の感情や知覚の揺れなどについて、今後、徐々に解明されていくであろうことについて論じた(小池, 2015; 乾, 2018)。

そしてそのようなさまざまなアプローチがあるなかで、個別の事例研究という方法論を本論文で採用することの意味や意義について、先行研究を紹介しながらその根拠を述べた。そして特に、河合（1992）が述べているように「物語」として事例を報告することによって、事実に加えて内的体験に基づく臨床の知の伝達が行われるということは、とても重要なポイントであると考え、本論文で事例研究という方法論をとることを示した。

また本論文では現代の思春期について考察するにあたり、事例研究とともに、現代の小説や物語、そして漫画作品などを考察の対象としているため、心理療法における物語には、どのような意味や意義があるのかについても述べた。そして主と客、自と他、こころと身体、そして「私」と「私の内面」とがつながるために、物語は力を発揮すること、このような考えを基礎に置く心理療法では、クライアントとセラピストの間に提示される夢・箱庭・語りといったイメージをひとつの物語として受け止めて考えていくことについての重要性について述べた。

第二章では、現代の思春期をとりまく現状について、筆者の主たる臨床実践現場である島根大学こころとそだちの相談センターという心理専門相談機関と、スクールカウンセラーとして関わっている学校現場から見てきたことについて述べた。教室や部活という同じ所属だからというだけでは自然に人間関係が生じることが難しくなっている現状があるため、所属している「場」に規定されている人間関係を自分が所属している共同体として認識することが困難になってきていること、それゆえ自分の人間関係のスキルで、自力での共同体を作らねばならなくなっている負担について具体的な事例を提示しながら考察した。

そのような状況のなか、現代の思春期の自己意識・他者意識には変化が見られ、「ひとりであること」を「ぼっち（ひとりぼっちの意）」と捉え、他者から「誰にも相手にされていない残念な人」だと思われているのではないかという意識に苦しむ状況が生まれていることについて論じた。この意識は、過去には思春期・青年期の神経症的傾向として主流だった対人恐怖の症状が、このような形をとって生じてきているのではないかと考察した。

そして、そのような苦しみを感ぜないようにするためには「イツメン」といういつも一緒にいるメンバーが共同体として必要になっている現状について事例から紹介した。この「イツメン」という共同体は学校に通い続けるための最低限の「インフラ」としての人間関係を自分の力で作り出す必要性が高まっていることにつながっているということについて指摘した。

このような状況がベースにあるため、以前にも増して「コミュニケーション能力」が重要視されるようになってきているなかで不適応に苦しむ思春期の子どもたちの事例について考察した。

第三章では、第二章で述べたような状況のなか、学校現場で生徒指導が必要となったとき、どのような指導が行われ、そこでどのような問題が起こっているのかについて、筆者がスクールカウンセラーとして派遣された実践から、学校のルールをめぐる事例をいくつか提示した。

そのなかでまず、子どもたちの集団のありようが変化しているなかで、旧態依然とした生徒指導が、いかに子どもの心から遠いものになっているのかについて事例から論じた。そしてそのことに気づいた教員が、教員集団で学校のルールの違和感について共有するときにも、ルールを変えるだけではそこに限局されたことになってしまい、子どものところからは離れてしまう危険が存在することについても指摘した。また、思春期の子どもにとっては、ルールを盾にして個人としての顔を見せない教師との関係がいかに不毛なものになるのかについて指摘すると同時に、学校現場で教師が個人としての判断をすることの構造的な困難さについても論じた。

その一方で、学校行事が思春期の子どもたちにとって、見事なイニシエーションの場になり、成長を大きく後押ししていく可能性についても事例から考察し、そのことが叶うためには管理職や教員、そして保護者たち周囲の大人の意識が大きな意味をもつことについて論じた。

第四章では、思春期という時期について別の角度からも考え、深く理解するために、現代の文学作品で描かれている思春期について考察した。

村田紗耶香、川上美映子、舞城王太郎、角田光代、島本理生、山下澄人、本谷有希子、中脇初枝など、現代の最先端の問題と取り組んでいる若手の小説家が、思春期の子どもを主人公として取り組んだ作品をとりあげて考察した。

そのなかで、思春期とこの世のロジックとは違う世界である「異界」とのかかわりをこれらのさまざまな文学作品の表現のなかに見出しながら、思春期の子どもたちを突き動かす「狂」の力や、自分自身の「生」の起源を求める感覚などについても論じた。

第五章では、漫画作品である『ヒカルの碁』と、遠野地方での伝承を聞き書きして記したものである『遠野物語』をテキストとして思春期の「異能性」と「異質性」そして、「異界」との関係について論じた。

『ヒカルの碁』では、「異界」の住人とバディになることで「異能性」に突き動かされて能力を発揮することができていた主人公が、そのバディを失うことによって、初めて主体的に動くことができるようになるプロセスについて、思春期と喪失のテーマに則して考察した。

『遠野物語』では、そこに描かれている「異界」について、「異質なもの」との遭遇の接点に生まれる意識について論じた。そしてネットとリアルが接点をもった瞬間に生じた思春期危機のありようを、ネット依存の事例について紹介しながら考察した。

第六章では、現代のひきこもり研究について概説したのち、思春期に始まった不登校から、そのままひきこもりになっていった全緘黙の事例が回復していったプロセスを「籠もり」というイニシエーションの視点を踏まえて紹介した。そして、ひきこもっている人たちの居づらさについて、河合(2002)が「鬼の子小綱」の昔話から、鬼と人間の間でできた「片子」という半鬼半人の子どもの居場所のなさの悲劇について述べていることから、その関連性について考察した。

またモンスターペアレントというような大仰な名づけかたに代表されるように、すべての出来事を過剰に学校の責任にして、自分で問題を引き受けることから徹底的に逃げる、未成熟で暴力的な親の存在がクローズアップされていることについても論じた。これは、円環的な充足性のなかに留まっていたところから西洋的な自我の確立を目指して踏みだし、何とか仕事に就き、結婚して親になった若者のなかに潜んでいた問題が表面化したものとしてとらえると、このモンスターペアレントのことも半鬼半人の「片子」として考えることもできるのではないかと論じた。

そして「鬼」というのは、日常のなかに受け入れ難いものとして示されているものであるというところから、続いての第七章では、夢枕獏原作・岡野玲子の『陰陽師』で描かれている世界をテキストにしながら、鬼や魑魅魍魎として表わされてきた日本古来の異界の否定的な側面から現代の思春期の事例について考察していった。

思春期の理屈の通らない攻撃性を鬼の仕業と考えたとき、それを収めていくためには、力で調伏するのではなく、その鬼だけに通じる優しい言葉をかけることの必要性などについて、実際の臨床事例とともに論じた。

第八章では、大人の常識的な世界とはまったく違う世界を生きている子どものことを、「異界」を生きるという視点から事例を通じて考察した。そして命が

関わるほどの拒食の症状を持っていた少女の事例を提示しながら、その少女が生き抜くことを強いられていた「異界」がどれくらい日常性を越えたものであったのかということを示した。その少女自身が回復していったきっかけになった「かぐや姫」の描画表現から、「かぐや姫の物語」を生き抜くということが、症状の消失と深く関係しているのではないかと論じ、日本の古典の物語が現代を生きる思春期の少女の内界の物語を示している可能性について指摘した。

第九章では、自分自身の思春期を生き抜いてこないまま大人になり、親になっていた母親が娘の思春期の問題に向かい合っていたプロセスを紹介した。子どもの思春期が問題になるだけでなく、親のほうも思春期心性が強いままであったりすることもあり、それが現代の思春期の子どもを守りを薄くしている可能性もあることについても述べた。

不登校の娘を持つ母親の面接プロセスを時系列で追いながら、その面接のなかで起こっていたことを、村上春樹の作品世界とリンクさせながら論じた。特に、思春期の娘への深い共感が開けていくとき、親自身の思春期の記憶が立ち上がったたり、目に見える現実だけではない、もうひとつ次元の違う現実に関心が向くようになっていくプロセスに関して考察した。そして思春期の親の年代の人たちの面接のなかで、中年以降の年齢なのに思春期心性が動いている事例に出会うことが増えて来ていることなどについても論じた。

終章では、思春期事例のなかで来談のきっかけになることが圧倒的に多い不登校という状況について、現代での見立てについて考察した。

平成 29 年度の文部科学省（以下、文科省と略す）（2018）の調査では、不登校になった要因のなかに、「学校における人間関係」がもっとも多く、そのなかでも特に注目されるのは「いじめを除く友人関係をめぐる問題（69.7%）が突出して高くなっている。文科省（2016）は、教育の機会確保に関する基本指針として、登校という結果のみを目標にするのではなく、社会的に自立することを目指す必要があるということを明記し、教育機関に通達しているが、この考え方はまだ教員にも保護者にも浸透しているとは言いがたく、直線的な再登校こそが不登校の解消と捉えられている部分がまだ大きい。スクールカウンセラーや専門機関の相談担当者としては、そのような教員と保護者の想いも否定せず、何とか子どもが社会的に自立していく方向性を示していくことが必要になっている。

そのため、不登校の背景にあるものが、個人としての成長のために必要なものなのか、それとも神経症的なものなのか、もっと重篤な精神障害があるのか、そ

れともベースに発達障害があるのか、怠学なのか、知的な問題があるのか、友人関係のトラブルがあるのか、家庭要因が大きいのか、そのいくつかが重なっているのかといったことを査定するのは、とても重要なことになっている。

文科省がいうところの「いじめを除く友人関係をめぐる問題」について事例を紹介しながら、なぜ、再登校を直線的に目指さないことも大切であると文科省が明言するに至ったのか、その裏側にある「インフラ」としての人間関係にまつわる問題など、ここまでの本論文の議論を踏まえて、事例を提示しながら総合的に考察した。

2010年頃から、SNSでのトラブルなど、SNSを巡る関係性の話題に終始する面接も圧倒的に増え、自分の在り方などに視点を向けて語るようになるまでには、年単位の面接期間が必要になってくることが増えた。

このことは、自分自身のことを語るという意味での「個人の問題」を中心に扱う臨床から、「関係性の問題」を面接室で扱う比率が高くなってきているとも考えられる。もちろん、どの時代でも「個人の問題」と「関係性の問題」は両方絡み合って存在していた。そして「関係性の問題」も、それは自分の捉え方次第で変えていくことが可能であるという「個人の問題」として捉えていく働きかけも受け入れられていた。しかし今の思春期の臨床では、それが難しくなってきた。

しかし「関係性の問題」に関わる表層的な問題を扱っていくことが、治療的な表現が可能になる「場」の生成に関わる治療イメージの共有という大事な取り組みになっているとも考えられる。そう考えれば、面接外での他職種とのコンサルテーションも非常に大切な臨床であると考えられる。つまりイメージが治療力をもつための「場」をどのように生成していくことができるのか、想像力を駆使して周囲の関係者と一緒に取り組んでいくのもまた、思春期をめぐる、イメージを用いた実にクリエイティブな臨床だと言えるのではないかと論じた。

本論文では心理療法におけるイニシエーションの様相について、各章でそれぞれ、事例の考察として触れてきた。しかし最近では思春期という子どもから大人へというイニシエーションの時期であっても、臨床のなかで概念がそのままの形で通用する割合は減ってきている。

一方、社会が急激な変化をし続けていたため、イニシエーションを経て次の段階へ進んでいくという思春期の在り方が、年代を問わずいつでも存在することに

なっている。そう考えると、すべての年代に思春期心性が見出せるようになっているとも言える。そのためイニシエーションにおけるコムニタスの希求のテーマが、薄く拡散し、表層的な「関係性の話題」という形に姿を変えて臨床場面に登場してきていると論じた。

文献

乾敏郎 (2018). 感情とはそもそも何なのか 現代科学で読み解く感情のしくみ
ミネルヴァ書房

河合隼雄 (1992). 心理療法序説 岩波書店

河合隼雄 (2002). 昔話と日本人の心 河合俊雄 (編) 岩波現代文庫

小池進介 (2015). 脳の思春期発達 長谷川寿一 (監修) 笠井清登・藤井直敬・
福田正人・長谷川真理子 (編) 思春期学 東京大学出版会 pp.131-144.

文部科学省 (2016). 不登校児童生徒への支援の在り方について (通知) (28 文
科初第 770 号) (http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1375981.htm)

文部科学省 (2018). 平成 29 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の
諸課題に関する調査結果について (初等中等教育局児童生徒課) (http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/_icsFiles/afieldfile/2018/10/25/1410392_1.pdf)